柏原市文化財概報1994－III

平　野　遺　跡

1995. 3

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市域では、縄文時代の絵画土器や古墳時代の直弧文を施した石棺、高井田横穴群や安福寺横穴群の線刻壁画等各時代の文化や思想を知る重要な文化財が沢山あります。

今回、平野遺跡で発見した弥生時代の絵画土器は、これまで全国で出土した絵画土器の中では動物の意匠を粘土で造形して貼り付けるという新しい発想のもので、楯の表現も正面形で確実に表したものが初例です。この風景は、狩りの様子を描いたものか、五穀豊穣の祭りごとを祈願したものでしょうか、また、敵の攻撃を迎え撃つ叙事詩を描いたものでしょうか。小さな土器片でしたが、現在でも芸術的、文化的に高水準の感覚を持った作品という評価に留らず歴史の一頁を示す一級資料として各方面から調査研究がなされますように祈ります。

調査に対しご理解とご協力を頂いた地元の方々と調査関係者には深く感謝すると共に、これを機会にしましてより一層の文化財保護へのご支援とご協力を賜りますようにお願い申し上げます。

平成７年３月

柏原市教育委員会

教育長　庖刀　和秀

例　　言

1．本書は、平成５年度に柏原市教育委員会が公共事業として実施した下水道管埋設に伴う平野遺跡における発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係　北野　重を担当者として、柏原市平野２丁目に所在する道路内において、平成５年９月24日～平成５年11月30日までの期間実施した。

3．発掘調査と本書作成にあたって、国立歴史民俗博物館副館長　佐原　眞、大阪府弥生博物館館長　金関　恕、同館　渡辺康弘、大阪府教育委員会　宮崎泰史、奈良県教育委員会　橋本裕行、田原本町教育委員会　藤田三郎、大阪府曙川小学校　奥田　尚の諸氏をはじめとして多くの方々にご指導、ご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

4．調査の実施にあたり、下記の諸氏の参加、協力があった。

米田　博　　山中誠一　　山田寛顕　　安村俊史　　石田成年　　寺川　款
生駒美洋子　阪口文子　　槇原美智子　山口　剛　　西島信彦　　百合藤厚子
椋本武司　　酒井英利香　乃一敏恵　　有江マスミ　村口ゆき子

5．本書の編集、執筆は、北野が行った。

6．本書で使用した方位と高さは、磁北とＴ．Ｐ．である。

平野遺跡の概略

柏原市は、大阪府の東南部に位置し、大阪府と奈良県の間に連なる生駒山地の麓にあたり、広ぼう東西方向6.60㎞、南北方向6.63㎞を測る、大阪府下30市中第19番目の面積（24.77㎢）を擁する小都市である。

市内を二大河川である大和川と石川が中心部で合流し、大阪平野へと流れ出ている。現在の河川の流れは江戸時代に付け替えられ、それ以前は生駒山地の連なりに平行するように北流していた。東大阪市と八尾市域に河内湖があり流れ込んでいたのである。この生駒山地西麓部の扇状地状台地には旧石器時代からの遺物の出土と縄文時代以降の集落が融通の距離を隔てながら形成される。集落遺跡の背後に丘陵部を持ち、西側平野部には古大和川又は河内湖が存在し、生活を行うには適した環境である。生駒山地西麓部の各集落遺跡には旧石器時代から継続した生活の痕跡が見られる。市域では北側から山ノ井遺跡、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡、高井田遺跡と続く遺跡群が営まれている。

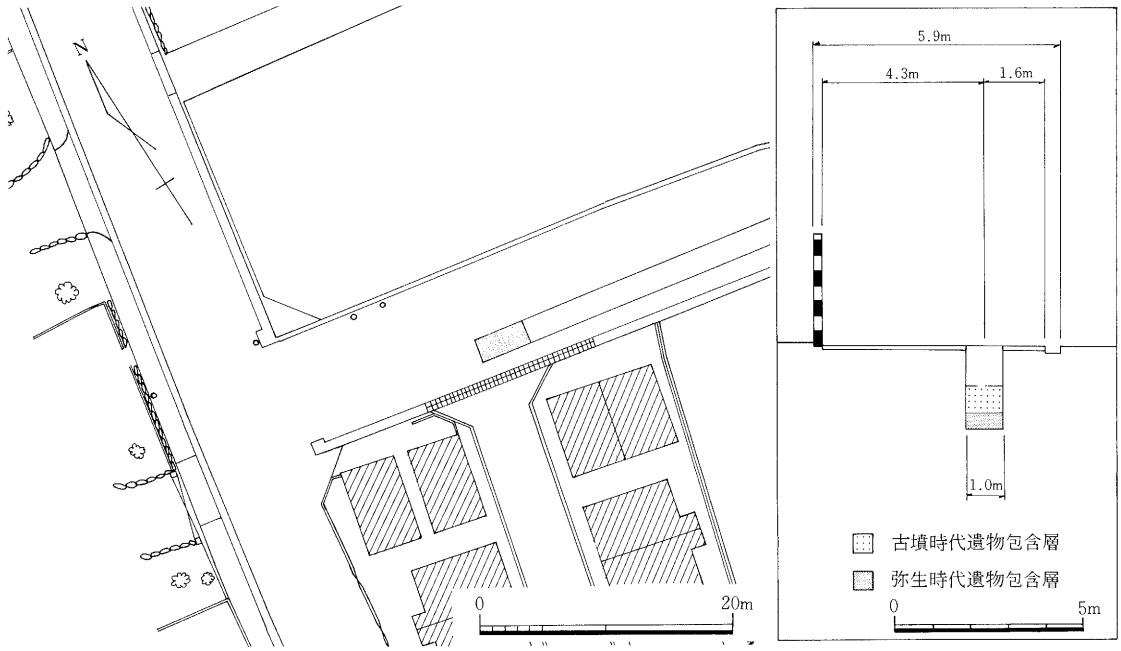
平野遺跡は、南北方向400m、東西方向500mの規模を持ち、生駒山地の麓から恩智川までの間に山麓沿いに集落が形成される。時期は、弥生時代後期から中世までの時期の遺構と遺物が検出されている。白鳳時代創建の三宅寺は、河内六大寺の中で唯一寺域が確定されていない。

図－1　周辺の遺跡

調査に至る経過

平野遺跡は、生駒山地西麓部に営まれた縄文時代から歴史時代までの集落遺跡である。当該地は、下水道が未設置地区であるため、下水道施設を普及させるため平成４、５年度にかけて柏原市が埋管を布設した。下水道管は現道路内に幅１ｍ、深さ２～３ｍの場所に径40㎝の管を設置するものである。今回の調査は、下水道事業に伴う事前の調査として実施した。調査の方法は、この下水道管埋設のために掘削する土層は、地下１～３ｍの部分で縄文時代から歴史時代までの遺物包含層があり、掘削時の立会により土層の確認と遺物の採集を実施した。工事は、国道170号線から直ぐ東側の市道から始まり、生駒山地に近い標高が高い地区へと順次進める手順である。今回の調査で出土した遺物は、標高12～20ｍの国道170号線から約200ｍ位の場所までが遺物の出土があり、それより標高が高い場所では後世の削平や攪乱或いは盛り土があってほとんど出土しなかった。これは、東側地区は遺跡の深度が浅く、西側地区が深いことから遺跡の保存状態が良好であったか否かである。

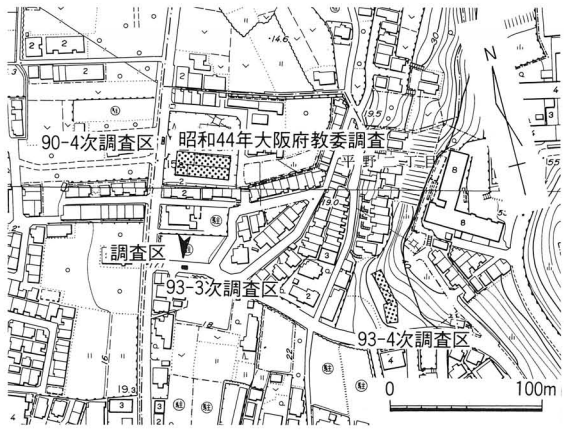
今回検出した弥生時代の包含層は、概略的に３つの土層に分かれ、上層は、盛り土、中層は、古墳時代から歴史時代までの遺物包含層、下層の弥生時代の遺物包含層である。遺物は、掘削時に立会調査で上げ土から採集した。断面観察を実施した基本土層は、地表下１ｍが盛り土、更に1.5ｍが古墳時代以降の遺物包含層で、更に下層が弥生時代遺物包含層であった。絵画土器は、下層の弥生時代後期に属する遺物包含層から出土した。



図－２　調査区位置図・断面模式図

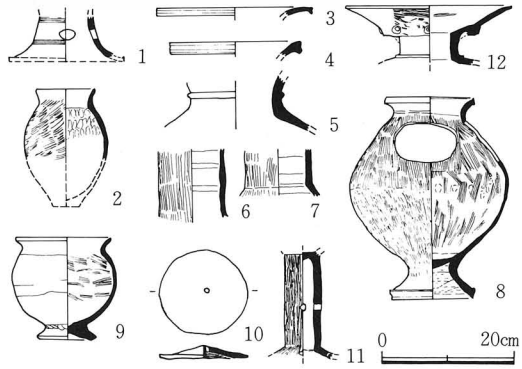
既往の調査

自然環境として、生駒山地の丘陵部が背後に広がり、生駒山地の谷部から流れ出る小河川が直ぐ前面を流れる古大和川或いは恩智川に流れ込んでいる。また、扇状地状台地と沖積地に広がる平野を形成している。古代からこの自然環境に恵まれ狩猟と漁撈、植物の採集等の生活に適した地域であったことは明らかである。時代毎にそれぞれの概要を述べたい。



図－3　調査地位置図

当地域での縄文時代の痕跡は、生駒山西麓部では、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡等があり、特に大県遺跡から早期、前期、中期、後期、晩期の時期の遺物が出土し、当遺跡群では拠点的遺跡である。大和川以西の遺跡群は、船橋遺跡、本郷遺跡等から前期から晩期にかけての土器が出土している。縄文時代晩期の土器形式に船橋式土器があるがこの遺跡の土器が指標となっている。



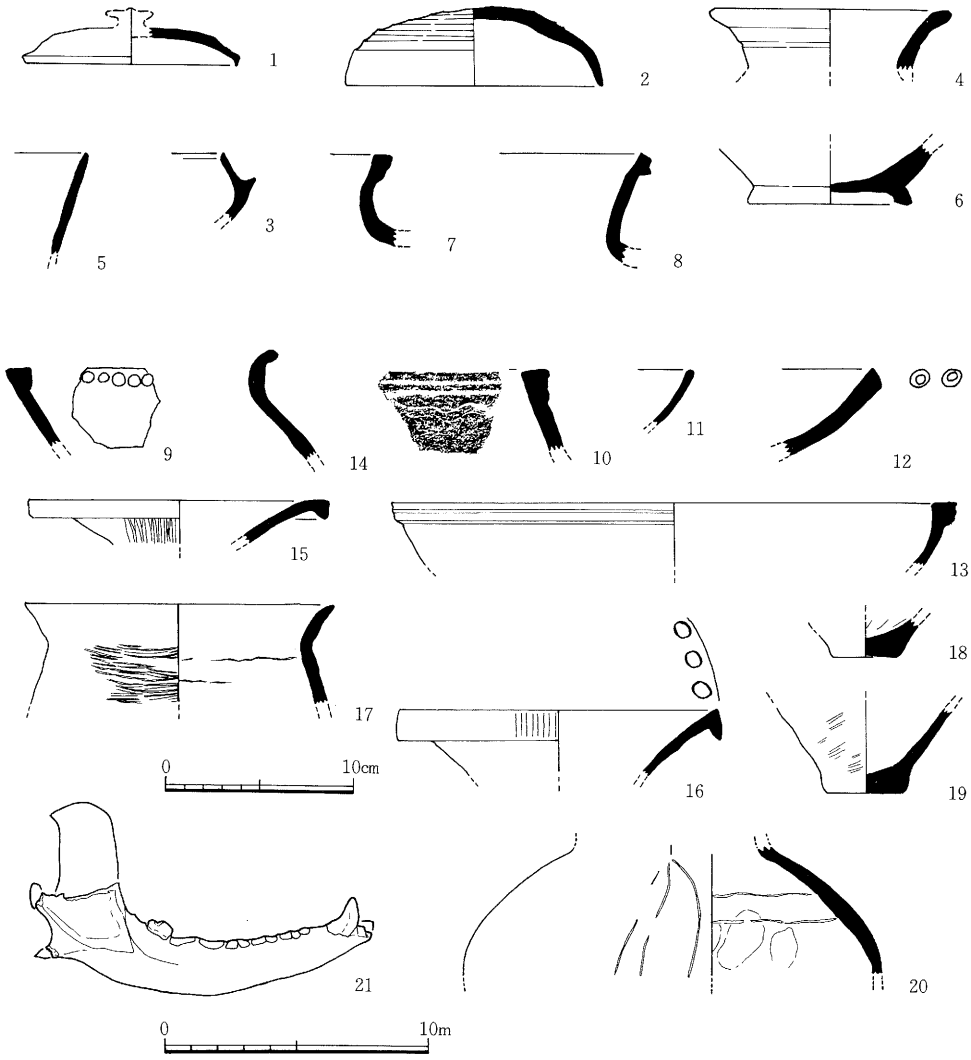
図－4　既往の調査出土遺物　1～8 昭和44年府教委調査区　9～11 90－4次調査区　12 93－4次調査区

弥生時代は、縄文時代から継承した集落が営まれ多くの遺構と遺物が出土している。山ノ井遺跡、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡が大県遺跡を中核として母子村を形成している。大県遺跡の後背に高尾山高地性集落が形成され今後その有機的な関連性が問われる遺跡である。また、この高尾山の近くから単独で渡来遺物と考えられる多鈕細文鏡が出土していることでも有名である。

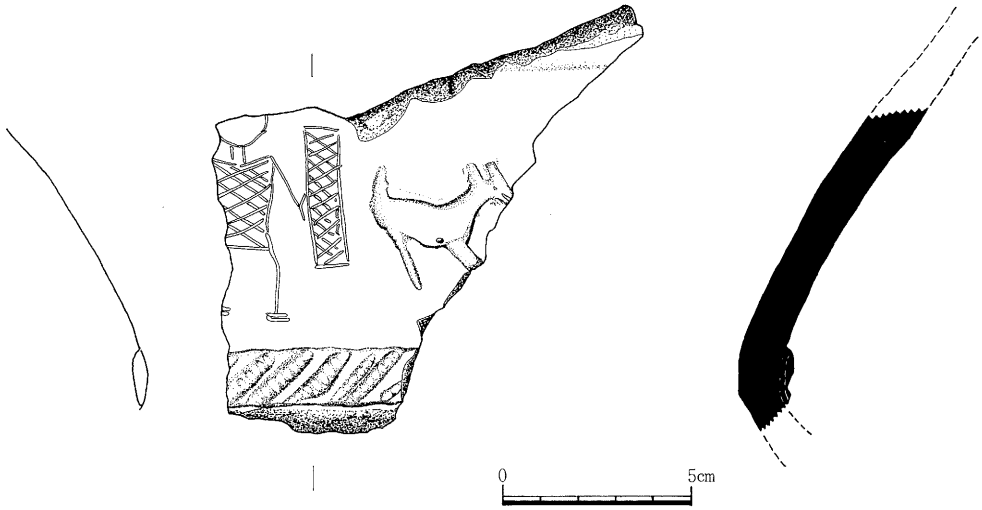
すでに大阪府教育委員会、柏原市教育委員会が数次の調査を実施している。主な調査は、昭和44年に行われた関西電力の変電所建設に伴う調査がある。弥生時代と古墳時代の遺構と遺物が出土している。遺構は、柏原市史第四巻にその代表的な遺物が報告されている。また、追加資料として大阪府立泉北考古資料館だより第42号に東海系の弥生土器が報告されている。土器(８)は、近畿地方では珍しい円窓付土器で短い高台が付き胴部に大きな孔が空けられている壺である。口縁部は、やや外反し端部が肥厚して垂下している。平成４年度柏原市教育委員会が実施した90-4次調査区は、170号線の下水道工事である。この調査から出土した台付き壺(９)は、短い高台が付き丸い体部に外反する口縁部がつく。体部の中程で胎土が異なる粘土を使用し、色調が上半と下半で大きく相異する珍しい壺である。平成５年度に実施した93-4次調査は、マンション建設に伴う調査で弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世の時期の遺構と遺物が出土している。

93－3次調査出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、獣骨等があり、実測が出来たのは、次の通りである。時期は、弥生時代後期、古墳時代後期、中近世と幅広く存在している。須恵器は、杯蓋（1,2）杯身（3）、壺（4,5,6）、甕（7,8）があり、6世紀後半から7世紀代のものが中心である。土師器は、砕片が多く時期が明確なものは出土しなかった。弥式土器は、鉢（9～13）、壺（15,16,20）、甕（17）、壺か甕の底部（18,19）がある。時期は、弥生時代後期に属して第Ⅳ、Ⅴ様式のものが大半である。壺（20）は、線刻を持つ資料である。体部のみ遺存し、時期や全体の形状が不明である。色調は、灰褐色、胎土は、石英、長石、角閃石を含み当地域産の粘土を使用している。線刻は、頸部と体部との境目から負の放物線と中央にやや屈曲した線が入る。絵画か記号か不明である。獣骨（21）は、犬の頭骨の下顎部である。この資料は、大阪市立大学医学部、大阪府教育委員会文化財保護課宮崎技師に鑑定とご教授を願っているが、弥生時代の犬骨と限定出来ない要素が多く、中近世の時期まで遡りうる可能性の持つ資料である。



図－5　その他の出土遺物



図－6　絵画土器

	人　　物	楯	犬
数値	全体　60以上（復元値63） 頭部　縦７以上，横14 頸部　長５，幅３ 体部　長29 肩幅　16以上（復元18） 腰幅　11（復元12） 脚部　長21（左）20（右） 爪先　左長５，高２ 　　右長３以上，高２ 腕部　左長17	全体　縦長43 　　横幅９～9.5	全体　横長40,縦高34,厚３ 頭部　18以上 口　長４以上 耳　長６ 頸部　長９位，幅5.5～９ 体部　長29胴部幅10～12 脚部　前脚長11以上，幅５ 　　後脚長18，幅４ 尻尾　長８，幅４
描方	線刻 線の太細 　太線　頭部の輪郭 　　頸，腕，脚部 　　体部の斜線 　細線　体部の輪郭 　　爪先	線刻 線の太細 　太線　輪郭 　細線　内側斜線	粘土貼り付け 粘土の厚薄 　体部が最も厚い 　頭部，脚部が次に厚い 　耳，尻尾が最も薄い 　耳，口は細棒先で切欠
模様	体部斜格子 　右下線（６本）を引いた 　後左下線（５本）を引く	内部斜格子 　左下線（９本）を引いた 　後左下線（10本）を引く	無文（ナデ調整）
方向	正面向　頭部，体部 斜目　腕，脚部 側面　爪先	正面　楯の表 斜目　裏側の突堤	斜目　耳 側面　体部全体

表－１　絵画土器概要（単位は㎜）

人物　人物は、頭部、頸部、体部、手足の各部が遺存し、その大きさは、縦6.0㎝、横2.4㎝以上を測る。頭部は、上半部が欠落し丸顔の下方だけである。描き方は３～４回の線に分けて顔中には目、口、鼻等の表現がない。この当時の銅鐸の人物にも同様に描かれていないので自然なのかも知れない。頸部は、頭部とは切り離して平行線で表している。体部は、肩幅がやや広い逆台形で体部の内側は斜格子で埋めている。肩はいかり肩で２本の線に分けている。手は、右手が欠落し、左手が楯を前方に持ち上げている。脚は、左右の脚が左前方に向けて少し折り曲げ動的な表現で、爪先は逆コの字形に描いている。

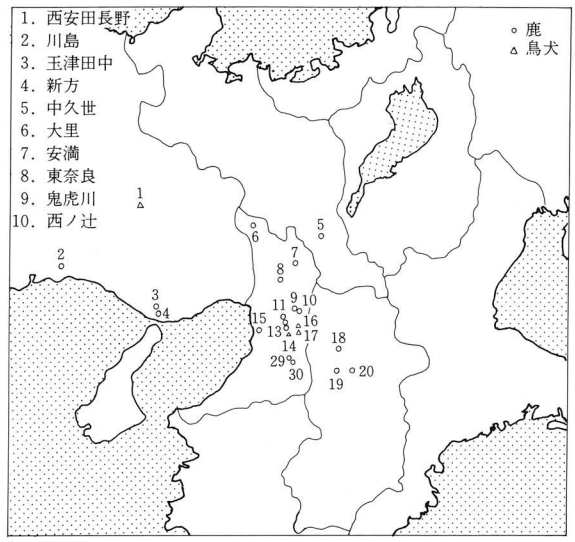
楯　楯は、人物の左手に持たれた持ち楯で、縦4.3㎝、横0.9㎝大を測る。楯の外縁は、わずかに屈曲して丸味を持たせている。裏側の把手（？）は中央部よりやや下方にクの字形で表す。正裏の両面が表現されているので、横幅が実際の大きさより狭いことが考えられる。伝群馬県高崎市出土狩猟文鏡の楯と類似性がある。

犬　犬は、粘土塊を貼り付けて形状を成し、縦3.6㎝、横4.0㎝の大きさを測り、土器との境目は細い棒状のものでなでて接合している。頭部は、前方を向き、口は、刻み目を入れ開口しているように見え、耳は短く二股で後上方に向けている。目の部分には黒色砂粒が入れられている。体部は、胸部が張り腰部が締まっている。腹部には長径２㎜の小穴がある。石が抜け落ちたものではなく、細棒を差していたようである。前後脚が真直ぐな一本の粘土で表し、体部に対して前方へ伸ばしている。尻尾は、上方へ真直ぐ伸ばしている。全体の粘土の厚みは、犬の体部を考慮して頭部、体部、脚部等に起伏を持たせ、土器との接合に丸味や傾斜角度を意識的に各部位で使い分けて手慣れた手法が見られる。

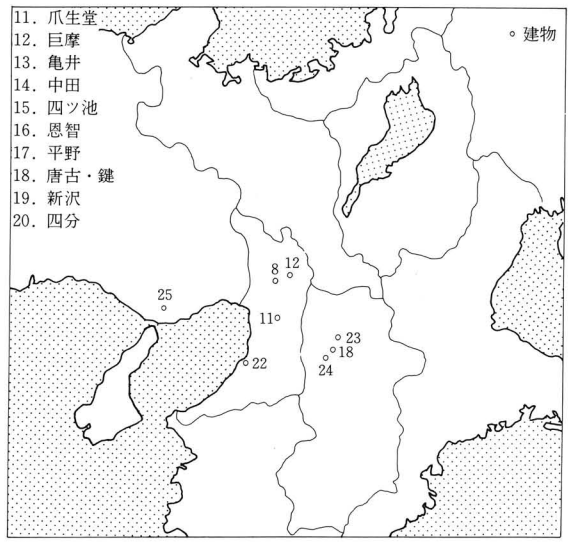
動物（鹿・鳥）　絵画土器の中で最も多く描かれている画材は、動物である。その中で鹿が最も多く、次に鳥である。発掘調査によって実際に遺跡から出土する動物の骨は、猪、鹿が圧倒的に多く、狼、狸、犬、熊、猿、兎等がある。鹿は、弥生時代の生活に大きく関わる理由は、「播磨風土記」には鹿の生き血を苗にかけると一夜の内に苗が成長したという記載があり、鹿の成長力を稲作に見立ててその霊力を貰い受けようとした儀式とも受け取れる。銅鐸に描かれた鹿は、弓を持つ人と、絵画土器では、家屋との組合せが多い。両者とも祭りに関わりを持ったのだろう。犬は、縄文時代から家犬として早くから家畜化されていた動物で絵画には少ない画材である。兵庫県西安田長野遺跡から小型のイノシシを追う犬の線刻がある。

建物　建物の絵画は、通常の住居である竪穴住居は少なく、米又は種籾を貯蔵した高床式倉庫、楼閣や神殿等集落の重要な役割や性格を持つ建物が圧倒的に多く描かれている。これらの建物が集落の中心部に位置し、食料の豊穣等を主目的とした祭りごとが行なわれ、この時に使用していた特別な土器や祭具は、絵画土器であったり、銅鐸、銅剣、銅鏡であったりするのだろう。

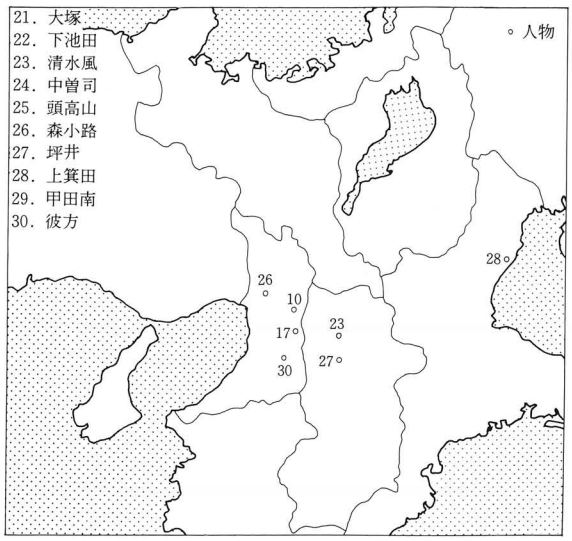
人物　人物の絵画土器の他に人面土器、蛇視文土器、土偶、分銅形土製品、木偶等の人物に関わる遺物がある。銅鐸の絵画には狩猟や農作業の風景が描かれ、身分的な差を感じる表現がない。しかし、絵画土器の人物には、羽衣を纏っている例や鳥の嘴を付けたような表現や頭に羽飾りを付け鳥装をした特異な人物の表現がある。河内平野では、絵画土器が描かれた時代に洪水が頻繁に発生し、稲の病害を示す痕跡も発見されていることから、このような自然の脅威に対して、神のお告げを伝える司祭者が次第に強大な権力を貯えていったことが考えられる。



図－7　動物(鹿・鳥)絵画土器出土地



図－8　建物絵画土器出土地



図－9　人物絵画土器出土地

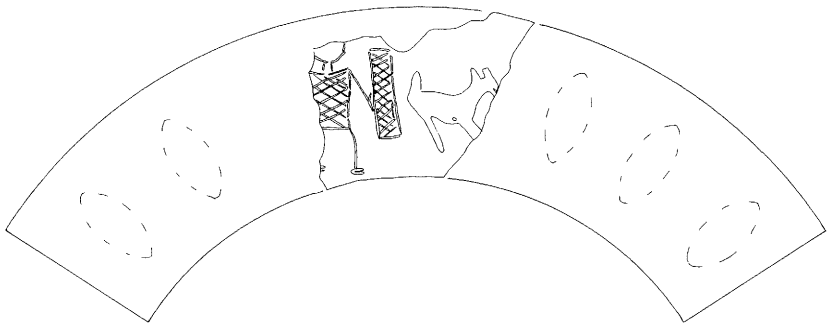
まとめ

絵画土器は、近畿地方で最も多く出土しているが、現代のような絵画を描く習慣やゆとり、必要性が少なかったようである。弥生時代の人々は、土器や祭具に絵画を施して更に願いを込めようとした。その時、土器や銅鐸に描いた画材は、祭りに関係を持った崇高なものであった筈で、普段の生活とかけた離れ喜怒哀楽の感情や願いを特別な気持ちとして表そうとした。

平野遺跡の絵画土器の画材は、人物、楯、犬とこれまで類例が少ない新しい発想の画材表現である。人物は、正面形に描きながら膝を折り爪先を向って右方向へ動的な仕種があり側面形で表している。楯は、弥生時代を通して明らかな絵画は今回が初例である。遺跡から出土する楯は、置楯が主流であるがこの楯は手楯である。山口県宮ケ久保遺跡から円形浮文が並ぶ貼り付け文の中に鳥、蛇、蛙、魚の陽飾した動物文があるが、この資料は、犬の形に造形した粘土を土器面に貼り付けて絵物語の一場面を立体化した絵画である。犬か鹿或いは別の動物ではないかという意見もあるが、尾・体の形、そして口を開いている表現から犬とみてよいだろうとする佐原氏のご意見に賛同したい。

絵画土器の情景が何を表しているのか。また、これらの絵画の前後に描かれた絵画があるのか、あればどのような画材であろうか。それらによって一連の情景が理解されよう。第一として、向って来る敵と戦争の一場面を示すものか。人物の反対の手に持つものが欠落して知れないが、犬は中小型犬位で口を開け蹲踞して怒りを表し前面にいる何者かに立ち向かっている。また、この犬の腹部に棒の差し込み痕跡があって矢を射られた情景が浮かんでくる。第二に、手楯の使用から楯を持つ人物が犬を追い回し、五穀豊穣の祭りの舞に犠牲獣として捧げる儀式の一場面なのか。伝群馬県高崎市八幡原町出土の狩猟文鏡に楯と武器を持っている情景に類似している。しかし、この鏡は4世紀代のものであるが、農耕儀礼の風景は弥生時代には形成された伝承と考えられている。

平野遺跡の性格については、まだ資料が少なく今後の調査例の増加が待たれるが、大県遺跡の一部分を形成し、当地域では生駒西麓部の集落遺跡を統合する拠点的な遺跡となる可能性がある。魏志倭人伝によると、弥生時代後期の日本には100余国があって、国が乱れていたとの記載がある。この地域も同様に戦乱の時期が存在したのだろう、戦闘の避難地として位置付けされる高尾山高地性集落がこの遺跡の後背地にあることから、平野遺跡が絵画土器が使用された時代にどのような環境や性格を持ったのか、また、地域の歴史的な位置付けが出来そうである。



図－10　絵画土器展開図

HIRANO Archaeological Sites

平 野 遺 跡

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1-43
TEL 0729(72)1501内5133
発行年月日　1995年3月31日
印　　刷　(株)中島弘文堂印刷所